

8
222

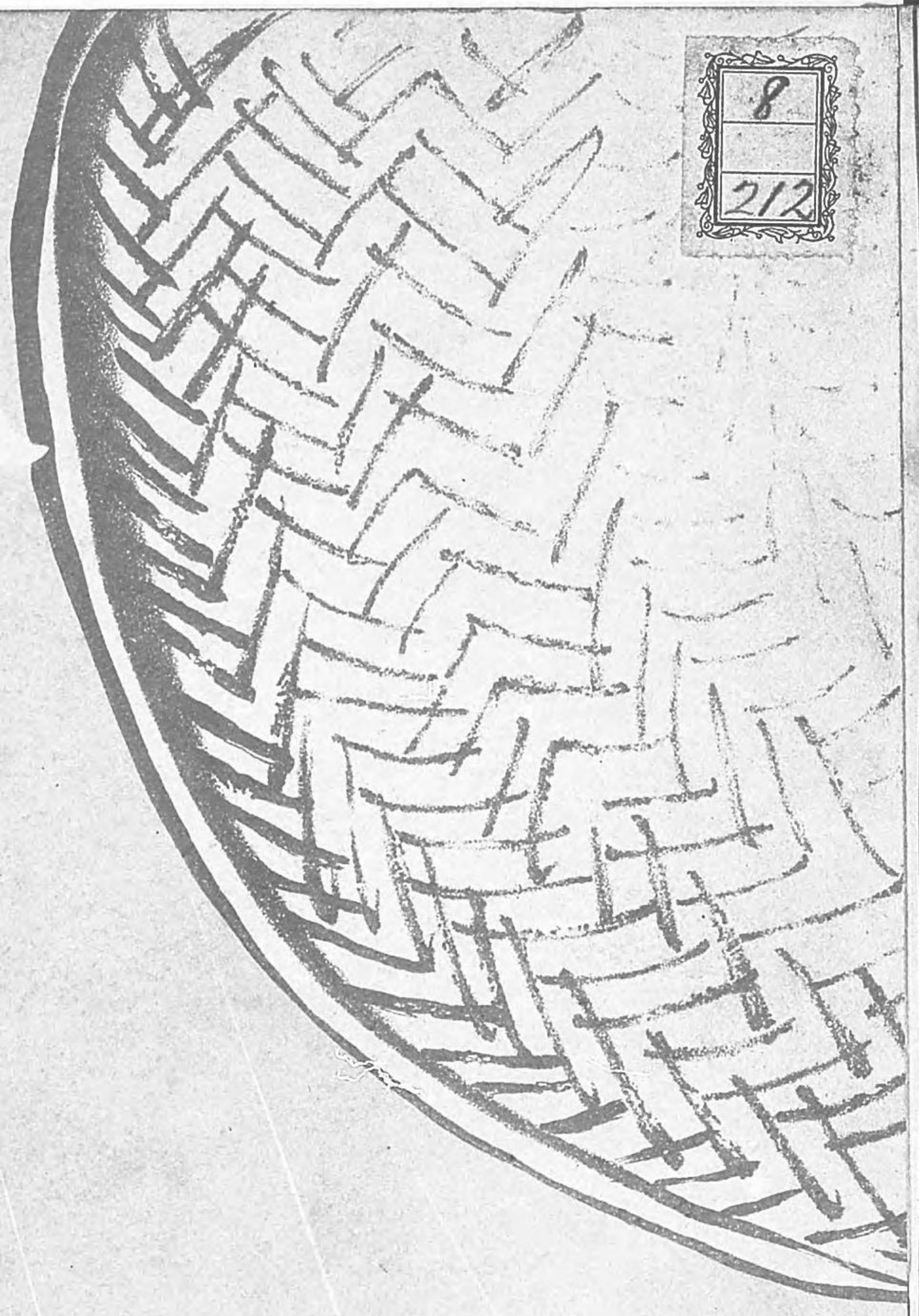
M

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 3 6 10 1 2 3 4 5

始



8
212



旅行家郎

本巻乃巻

8
212



木曾の家つと

雲耶山耶旅寝の時定めなく立ちては泊りどまりては、
 立場につがする息杖も駕籠か馬かの中を行く木曾の
 河流は遠くしてその驛路もはるかなりざる程にさて
 も其後岡倉天心川端玉章寺崎宗山劍持中洲とおのれ
 との同行五人京よりの戻り道を旅はこれぞと檜木笠
 隠れ美濃路も忍ぶ身は人目をつゝ、黒小袖の揃ふ氣
 合も旅鴉真似る鶺鴒の宿はづれ乞食に錢を暮れ行く
 春は蝶うらら〜と氣も寒からず悠々として土橋を越
 すに天高うして空青みたり揚がる雲雀の歌袋ちよる
 水を渡る風に麥面白う波を寄せて東風孕む帆の
 野中を行くは川あるべしと名を問へばあれこそ
 木曾川なり山を出で、四五十里こゝにて海の如くな
 れるが彼方の下手に夕陽を射けて青薔白壁繪のやう
 に立てる犬山城の下を流るいざ進ませ給へ観音坂の
 絶景は程遠からずといふ崖を傳へて至れば路は水よ
 り高きこと千尺松倒れんとして巖石時てり遠く勝山
 の宿を見遣れば危橋夢よりも遙に驛馬豆の如し太田
 の波を越して御筈に宿るに宵より小雨降り出したれ
 ば翌朝は桐油笠の身繕ひして日吉峠にかゝる麓に雲
 の村々捨て難き眺望無きにしもあらざれば草臥れて
 はたゞ旅籠のみ急がれて中津川町に宿りぬ落合より



新道を辿りて進めば、水近く山聳えたる中を兎角して山口村に出るに、龍巖と稱する名所あり、河中に島をなして水碧潭に渦巻けり、柴負へる樵童の無邪氣なる花にも鳥にも目は移らで、人の身の春行くも知らざりけり、殿母橋に至れば、馬籠峠雲に聳えて立つ山窮りて年老りたる松檜路を狭んで、晝も尙ほ小暗く路はその腰を繞りて、溪流に沿ふて通ず、吾妻橋より飯田に出る路ありて、雪の駒が嶽遙に見ゆ、この夜須原に宿るに、鹽に砂のざらつく、行燈の火の微かなる旅の哀れはこゝらにありと、湯に浴れば混堂のうたてさ、善光寺詣の女導者が髪を洗へる黒髪附の油の浮ぶなど、東男の我慢のならぬ所なり、更けて夜風の寒ければ、炬燵に火を煽さして、木曾冠者が最期の昔を語るに、寝鳥の闇に立てる、溪水の微に響きて、雲眠り人無き枕の閑寂なる夜長うして年の如くなるを、奈何せむ、明けてこゝを立出づるとて、村の男に春の何時來るべきやを問へば、梅も櫻も一時に咲き申す、花は都の五月中頃なるべしといふ、宜なり時は四月の二十七日、都も京も櫻は散りて、廿日は過ぎたり、ざるを此地は未だ梅も咲かず、人は綿厚き衣を二つ襲ねて、寒を爐邊に凌ぐをや、この朝も名物のどろ汁を、したゝか腹にこらせ、優しき少女が賣來れる花漬を、家苞にして、こゝを立町の宿を過ぐれば、小野の瀧あり、岩山の間より落ちて、木曾川に流るなほ行けば

滑川橋ありて、木下間の苔露けし、寢覺の宿は山の麓のや、開きたる所にあり、戸々名物の蕎麥切を賣りて、旅する人の草鞋を休めしむ、臨川寺より床山を眺望すれば、山の容水の態目も覺ゆべし、越あり上松の宿を過ぐるに、木曾の棧今もその俵を残して、芭蕉が命をからむ、葛かつらといひけむ、碑と山の根に掛茶屋ありて、名物の藏餅を賣りき、福嶋の町は家の數三四百もあるべし、昔はこゝに關所ありて、鐵砲と旅する女とを改めしと、か兎角女人は物議の種、鳴と二つ玉に見られしこそ可笑けれ、宮の越を出れば、木曾義公舊里碑あり、風越山の麓や、小高き丘に、枯木立夕陽に黒く立つ中に、いと大やかなる碑のあれば、柵前に佇立みて、その文を讀む間に、何處より來にけむ、忽然として二人の童子現れたり、眉目清秀、義仲が幼時にも似たるか、手には白き紫なる花莖を摘みて、我に親しむ氣色の罪無さ、日は落ちて、月はあらず、川原を見れば、馬を洗ふて歸るあり、托鉢の僧の霽に隠るゝもあり、この夕暮の淋しきを、巴が淵を過ぎ行くに、葦原の宿は間なりき、今宵はこゝに夢を結びて、曉に村を立出づれば、朝の雲は峯にかゝれり、雲や何處と分け行くに、鳥居峠は風寒く、雨さへ颯と落し來れば、御嶽の祠に風を避くるに、麓は見るゝ霧に隠れて、たゞ石佛の嚴しきのみ、山の凄さを一入添へぬ、奈良井、寶川、洗馬より分れて、松本の城下に着けば、櫻は

今が見頃なり松に天守の聳えたる昔の態の残るも嬉しくこの夜は快く眠り晨に快く床を離れて松城館に知人と酌めば永き日は午になれり旅急ぐ身のいざとてこの町を出で下押野に宿りぬ左遷ならぬ身の如何にしてかゝるいふせき我の宿に泊りけるかと思へば柳屋といふ名の哀にも聞きなされて明くるを待ち兼ね舟呼びて犀川を下るに急流矢の如く兩岸の風景繪よりも妙なり繪にせば何人の手に似たる宋明の山水の如く我朝にては文晁の筆に似て頗る雄大の趣あり舟行き景變じて江南江北村あり家あり煙を帯ぶる柳と露重して散る櫻とあり青山は眠る如く赭山燃えて頼れんとするが如し其景色の妙なる山水寺といふに至りて趣全く一變す山窮り水迫りて奇岩溪流を嚼む翠微に亭あり石門に苔あり舟を維いで坐して痛飲するに宜しまた急湍を下するに水平漫にして景酷だ佳ならざれども遠山に雪あり日に輝く所其色紫に近巒に松あり鳥飛ぶ時その影黒し崖低くして村舎杜に隠れ舟緩うして鷄犬の聲を聴くべし河中に水車あり山間に渡船場あり新町より陸行するに一里にして久米路橋虹の如く架り犀川その下を流れて不動池橋の上より落つ山の容の奇なる松あり花あり景と景との取合せ好き他に得難きの好景なりこの夜は篠井を経て上田町に宿り翌朝別所にいたりて安樂寺の四層

八角塔を見しに金碧を假らざれども結構頗る雅致ありこは開山樵谷禪師入唐の後建立する所にして時は足利の初代なりといふ境内瀟洒人意を爽にす温泉場の入口なる北向堂に參詣群集頗る繁華場たり國分寺は上田より二十町昔の俵をといひるもの僅に古瓦三重塔や古けれども本堂は見るに足らず上田の城も大方は取毀たれてわづかに一廓を除せるのみしかも柳は翠にして花は年々紅の色を染むれば幾多の英雄その國と共に滅びて山河長へに空しく在り君見すやあれわの川中嶋船頭蘆荻に舟を維いで鳥立つ中に悠々昔を夢むものあるをわい々左様で御座いと友の云へるを半は茶にして長野に着けば停車場前の雑沓は言語に絶えたり茶屋の檐に花を染出したる暖簾のひらつく床几には如來の影頼む爺婆の一群二群宿引の男に牽かれ行く後になりてわれも御光を便れば只ある高樓に導かれぬ郷に入りては業腹も煮されずと酒に旅の苦を忘れて欄前に暮るゝ日の遅々たるを憾み坐に入る春風の酔を吹くを喜びつ明日は久々にて故郷に歸らむをのみ心頼みにして宴をたゝみ月の黒きに乘じて善光寺に詣でぬたい看る間に本堂の黒装束星と輝く兩眼の常燈明を便りて階段を上り堂内に進めば通夜とか唱へて佛の御前に唱名申して明朝の日の出を待つなる男女の蛭虫のやうに寄居たるが作

りし罪を滅さんとて、懺悔し合ふもあれば、廊下を巡る
不寝番の爺の節哀れ氣に、ナマダブ〜と百萬遍を唱
ふるもありき、室内には天井に吊せる紙燈一つのみ、光
明十方を照らす、隅々の小暗き方に、蟬天蓋などのち
ら〜眼に入る、外闇中物色無ければ、氣澄み神眠りて、
世を厭ひ俗を惡みする人の如何に信仰を深うするな
らむ、人定識無ければ、迷信深し、迷信は闇なり、信仰は火
なり、されば今宵通夜する輩の、この薄淋しき大堂に、こ
の星の如き一道の火を頼みにするは、なほ道に迷へる
旅客の野に燈光を認めしが、如くなるべし、玄かく安心
して眠らば、夢には繪に見馴れたる如來の來迎もある
べく、經文の中の極樂にも到り得べし、畢竟邪正は一如、
榮華も遊山の酒の泡花を散らすまでは、吹かぬ春の風
に消ゆる間こそ、夢なれ、浮世なれ、觀じ來れば、義仲も幸
村も、謙信も、信玄も、榮ふる中は、醉心地醒むれば、矢張熊
八同様の土饅頭が、關の山どと、悟り顔して、東都に歸れ
ば、右にも左にも、英雄豪傑の鼻突合、木曾の冠者、渠何者
ぞ、僕も人なり、奴も人なりと、鼻齧めかする人の多くて、
實に住まば鼻の都なる。

丁酉九月

乙羽生識

木曾川沿岸小松原より勝山遠望

美濃國鷓沼より一里、窟の觀音あり

勝山窟觀音木曾川の西傍に
あり大窟の中に石像の觀世
音を安置し傍より清泉流れ
出る此側の風色いらぶるし
くして岩石崔嵬たり他境に
すぐれて奇絶の所也

木曾路名所圖會



本會川部峯小窓風の御山景望

美濃國藤原より一里、窟の瑞音あり

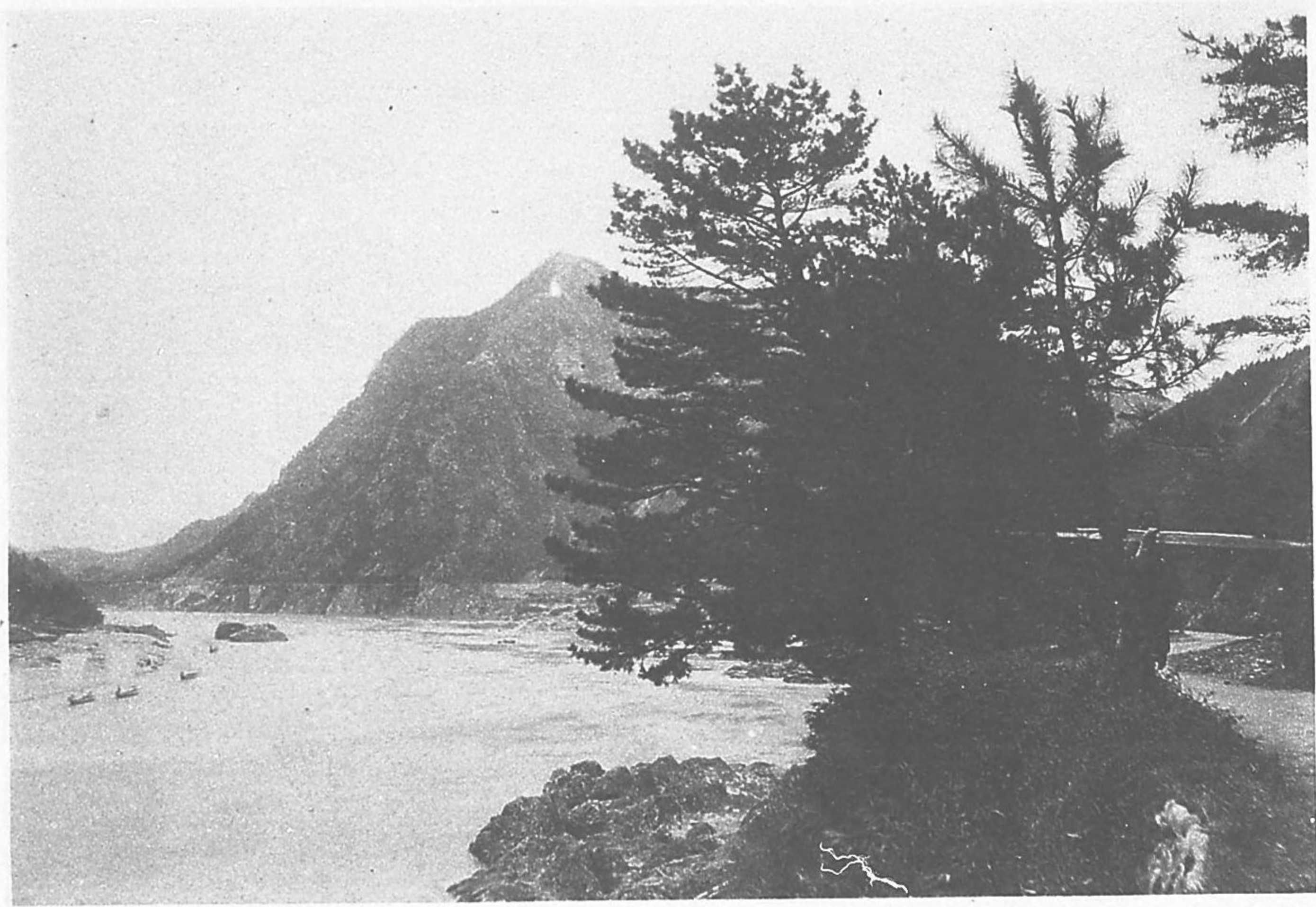
本會川部峯小窓風の御山景望
 予、此の峯に登りて、河也……
 くと、谷下、巖、水、石、並、列、に
 出、る、此、の、風、西、へ、と、流、る、に
 音、が、空、を、穿、つ、て、こ、こ、に、響、き、出、る、に
 是、れ、大、龍、の、中、に、音、の、響、き、出、る、に
 御山景望、本會川部峯小窓風の御山景望

觀音坂より帆掛舟を望む

前と同じところ

灘急舟走、兩岸巒嶺、一時皆
掩、當前所見、倏忽在後、唯見
岸行山走、而不覺舟移、山皆
石身、載土、松爲之髮、而紅杜
鵝粧點於其間、羅血如滴、

下岐蘇川記



驛音遊よの地樹林の景

前と同しなり

..... 才、難、阻、阻
 湖、嶽、臨、其、間、顯、血、吸、露、...
 不、難、就、士、樹、雲、之、製、而、遊、林
 翠、山、由、而、不、覺、我、遊、山、曾
 誰、當、而、視、其、常、流、空、空、無、其、...
 驚、心、我、輩、兩、望、靜、靜、一、如、昔

日吉峠の奇巖

美濃國御嵩より金戸に抵る新道也

山家集
夜る晝の

さかひはこゝに有明の

月吉日吉

里をならべて

西行



日吉峠の奇巖

美濃國勝安寺の谷戸に遊る藤原氏

坂の盡
の

まのひらいたての

日吉日吉

里ひらひら

西



信濃山口新道の龍巖

美濃と信濃の落合より新道を一里餘

斯くして上り行きゆくに、
龍巖といふ奇岩あり、河
中に小き島をなして、杜の
中に祠あり、龍栖む處と稱
ふるをい……五鷄行



なること……五箇年
中二箇より三箇の歳を
こ小き島がしつ、林の
隙間に、木々の影の、河
流くじり上り、手をのこ

美濃と計敷の谷合より海童を二里翁

計敷山口海童の窟窟

賤母橋より馬籠峠を望む

山口新道の中、橋畔に一軒茶屋あり

馬籠にかゝりて不圖野猪
の肉あるよしを聞き悦ん
で食ふに、爰より臭きが上
に肉硬くして、しかもじや
りん／＼と舌觸りするもの
あり、能く／＼見れば皮を
突へあるに驚きて聞へば、
此邊にては皮を剥ぐさい
ふこそ無く、藁火を以て毛
を焚き去り、其じやりん／＼
とする所を賞翫なして食
ふ……枕頭山水……幸田露伴



本……野原山水……幸田松岩
 びやさ神が賞讃がしつ食
 ぶ焚を去り其じやせし
 ふこを誰く蕨火が良ア手
 此盛のつ日虫が膝うさひ
 突へはるこ湯をつ開へ割
 ざり踏くく／良馬割虫が
 せふ／と音聞しするまの
 こ肉野くじつじやせしや
 け食ふこふれり身をつ上
 の肉さるまじつ間を割ふ
 風節こせ／りつ不圖裡察

山口藤原の中、謝柳の二神茶屋の

類掛詩も、風鈴神も望む

山口村崖道の古林

賤母の茶屋より木曾川沿岸也

岐岨從來念劔門。
貼危不_レ管近_レ熊原。
巖連棧道懸_レ空渡。
峽急灘聲轉_レ谷埕。
古木千_レ嶂籠_レ日月。
深山一路隔_レ乾坤。
最驚盛夏雲端雪。
諸嶽中天冷_レ可_レ捫。
岐留山行 服部南郭

九十九折の山路

前と同じところ



儻傑相呼涉洞隅。
亂山環合水榮紆。
石罅巖仄人如蟻。
續々穿過九曲珠。

齊藤誠軒





式十武隈の山嶺

前と回とまじり



嶺と谷は火曲を
不難に入城
山嶺合を築
新築の町



吾妻村より駒ヶ嶽遠望

この村外にて舊道と落合ふなり

其上に駒ヶ嶽見ゆる、山上
に滝あり、其深き事はかり
がたし、駒石さて五つあり、
其内一つは夥敷磐石也、何
れも駒の形に似たるに因
て山の名とす、雪は極暑と
いへどもたえず……………
千曲之眞砂

小野の瀧

須原の宿より寢覺に抵る間也

木曾路の小野瀧といふは
布引箕面などにもおさお
さをこりやはするこれ程
の物の此國の歌枕にいか
にもらしけるぞや……
……老の木曾越……細川玄旨



小
裡
の
齋

栗鼠の音も遠くはる間也

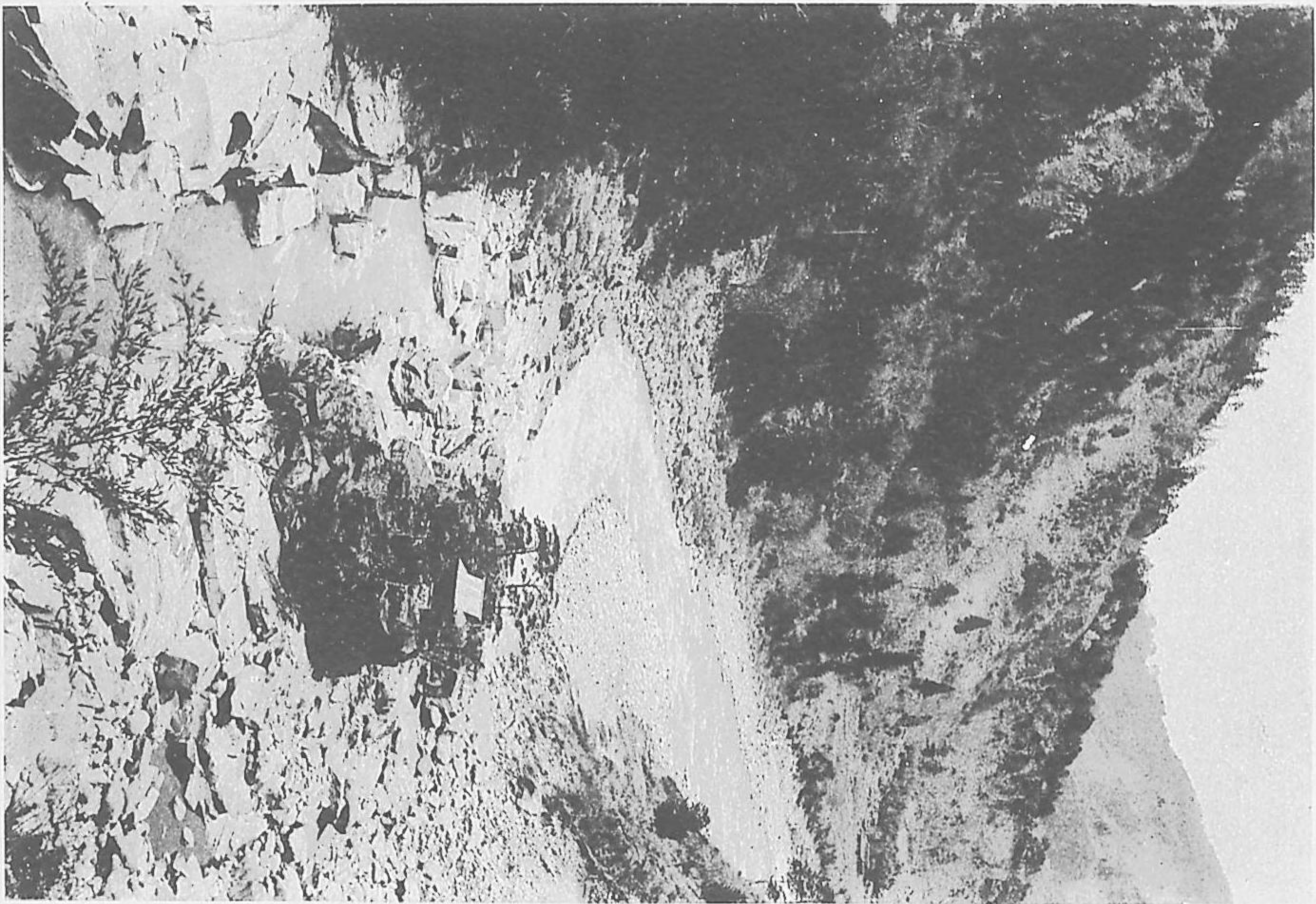
……水音……… 藤川堂
……しむる………
の 齋の 此園の 郊遊の……
……しむる………
……此園の………
水音の 小裡齋………

寢 覺 の 床

これは臨川寺より見たる所名物蕎麥あり

山又山を越え過ぎて、
行けば程なき旅衣、
木曾の御坂も近づくや、
嵐に更くる夜半の空、
寢覺の床は是れ、こよ……
……論曲……
……れさめ

臨川寺の客殿より見下
す也下道もありれさめ
の床岩十間に四十間ば
かり高き所に辨財天の
社あり其一段低き所を
取分て寢覺の床さいふ
名石數々名あれども記
すにいこまなし……
……岐路安見繪圖



舞 臺 の 末

五峰山調川寺より見たる洞谷舞臺の概観

……洞谷の
……洞谷の
……洞谷の
……洞谷の
……洞谷の
……洞谷の
……洞谷の
……洞谷の
……洞谷の
……洞谷の

洞谷舞臺の概観
洞谷舞臺の概観
洞谷舞臺の概観
洞谷舞臺の概観
洞谷舞臺の概観
洞谷舞臺の概観
洞谷舞臺の概観
洞谷舞臺の概観
洞谷舞臺の概観
洞谷舞臺の概観

木曾棧の舊跡

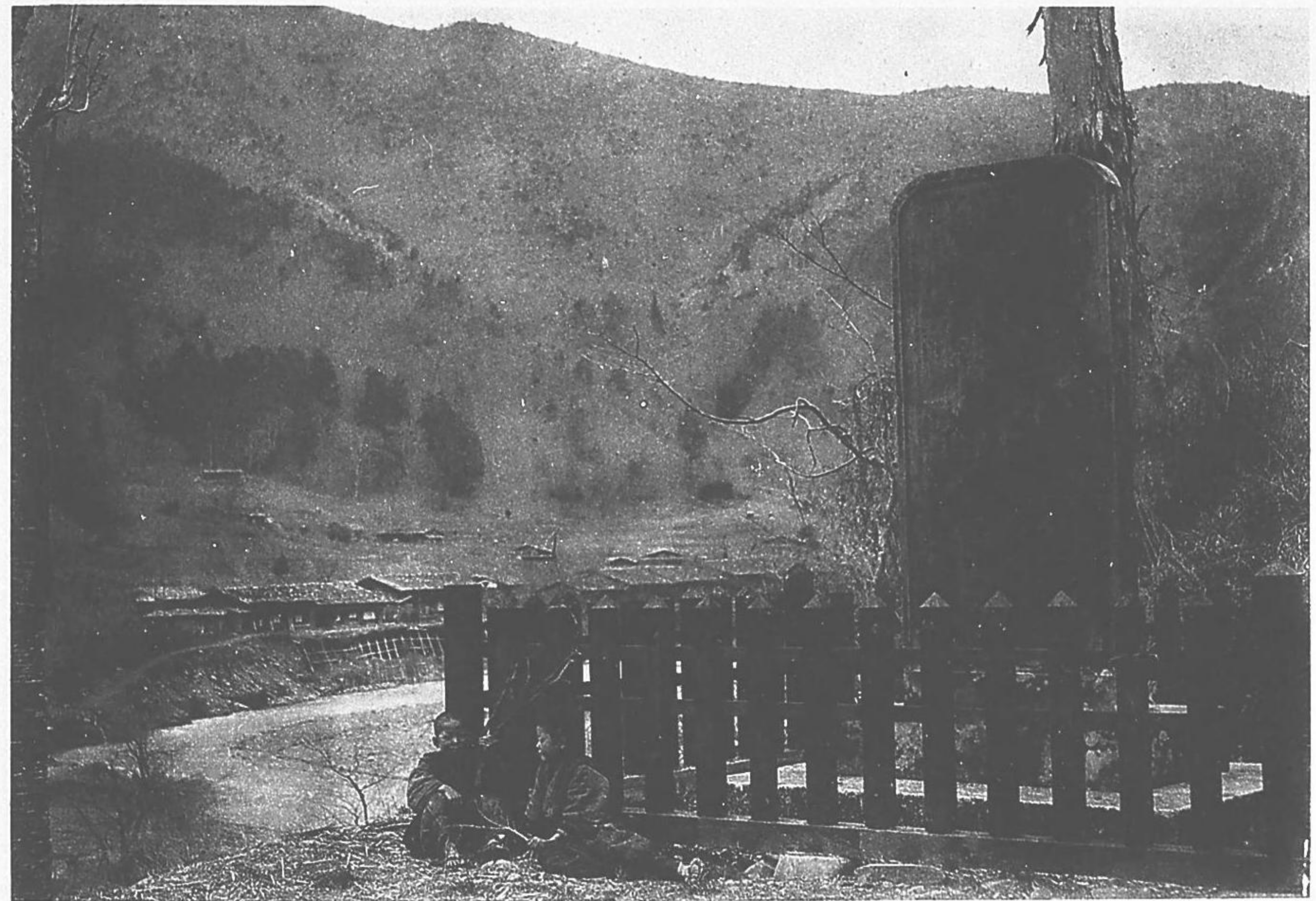
宮の越、福嶋の間翁が棧やの碑あり

高山奇峯頭の上におほひ
重りて左は大河なけれ岸
下は千尋の思ひをなし尺
地もたひらかならされば
鞍の上静ならず只あやう
き頼のみやむ時なし棧は
し寢覺なき過て猿か馬場
たら峠なまは四十八曲り
とや……更科紀行……芭蕉

木曾義仲舊里の碑

宮の越村にあり義仲屋敷跡也

宮の越の前徳恩寺村の川むか
ひ左に入幡の宮あり是木曾義
仲の社と云ふ其上の山を宮の
尾と云ふ上に少し平なる所み
ゆる城の如く也小なる堀あり
と云ふ社の下に木曾義仲の屋
敷の跡あり平地なり横二町ば
かり長六町程あり其川向に徳
恩寺あり巴が屋敷の跡こゝに
あり山吹が平も右にあり……
……木曾路之記………具原篤信



木曾養神書里の軒

宮の鎮林にも養神屋敷遺跡

木曾親太郎 貞原宮治
 此の山奥に平らな宮の跡あり
 屋敷の跡に思はれ難き朝の光に
 けり其穴道跡も其根柢跡
 跡の概は平敷かり跡二個あり
 云ふ據の丁に木曾養神の屋
 敷の跡の跡より小なる跡あり
 頭と云ふ土に也丁平なる跡あり
 申の跡と云ふ其上の山に宮の
 心法に八割の宮あり其木曾養
 神の跡の跡前跡屋敷跡の跡あり

鳥居峠の石佛

山上に御嶽の祠あり境内石佛多し

雲雀より上にあすらふ峠かな
こ芭蕉が詠みしは此の鳥居峠
なり雨は合羽の裾よりまくり
上げに降る此曲降を防がんや
うなく只濡なるに春はまた汗
なり一里に足らぬ峠なれど急
上りの急下りなれば大辟易の
形さなりぬ……………
……木曾道中記……………饗庭篁村



……水音 旅中語…… 晴 風 草 村
 紙の び び び
 止りの 澄すも せし 川大 瀬 泉の
 かり 一里の 風と 雨 ながれ せ
 ら なく 只 静かなる 二 響 け ま び 平
 止り 二 響 け せ 曲 折 せ ぬ け び け
 び け 響 け 合 奏 の 静 け け せ け せ
 と 西 照 せ ぬ け せ け け け け け け
 静 け け け け け け け け け け け

山上に静寂の風を吹く(石巻夕づ)

鳥居 静の石巻

信濃松本城

洗馬より木曾路を離るゝ也

松平丹波守居城にて七
萬石を領せらる城下の
町廣く大通十三街町數
凡四十八町商家軒をな
らべ當國第一の都會に
て信府と稱す……………
善光寺道名所圖會

犀川山水寺

下押野より舟にて犀川を下るなり

舟にて犀川を下るに、*

景色一變、太古の山水

と大に其趣を異にす、*

局面雄大、宋明の山水

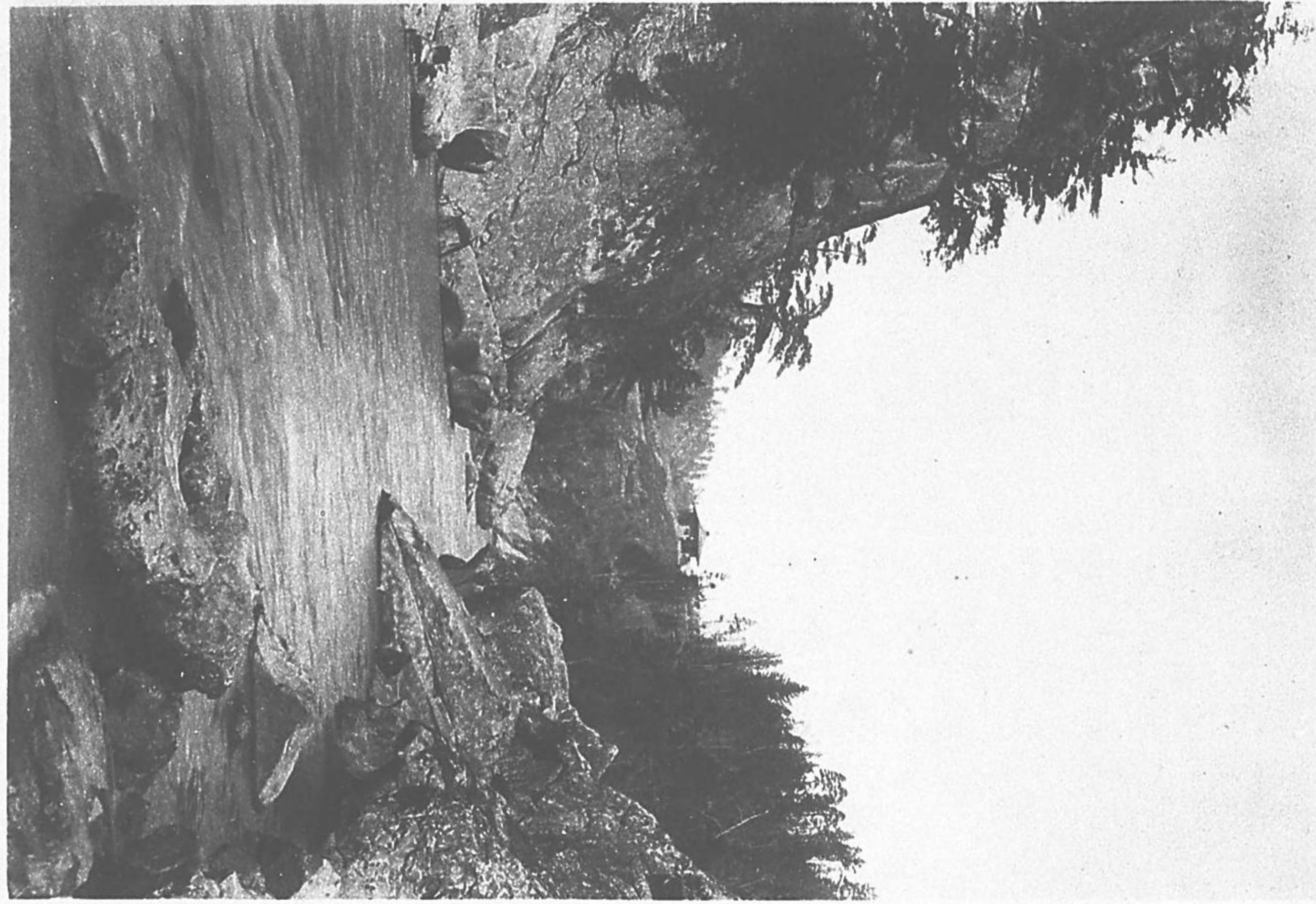
畫を見るが如し、山水

寺に至れば、寢覺床山

の如く、山道り水窮り

て、奇岩天に峙てり……*

……渡信四十勝



嵐川山水 卷

不詳裡より流るる嵐川を写するなり

○
 ア、奇景天の袖アリ……
 ○ 嵐、山並に水流り
 寺に在り、錦帯橋山
 雲を長きせ破り、山水
 風面激火、東陽の山水
 多火に其趣を異にす、
 景色二變、水音の山水
 此の二景は、水音の山水
 此の二景は、水音の山水

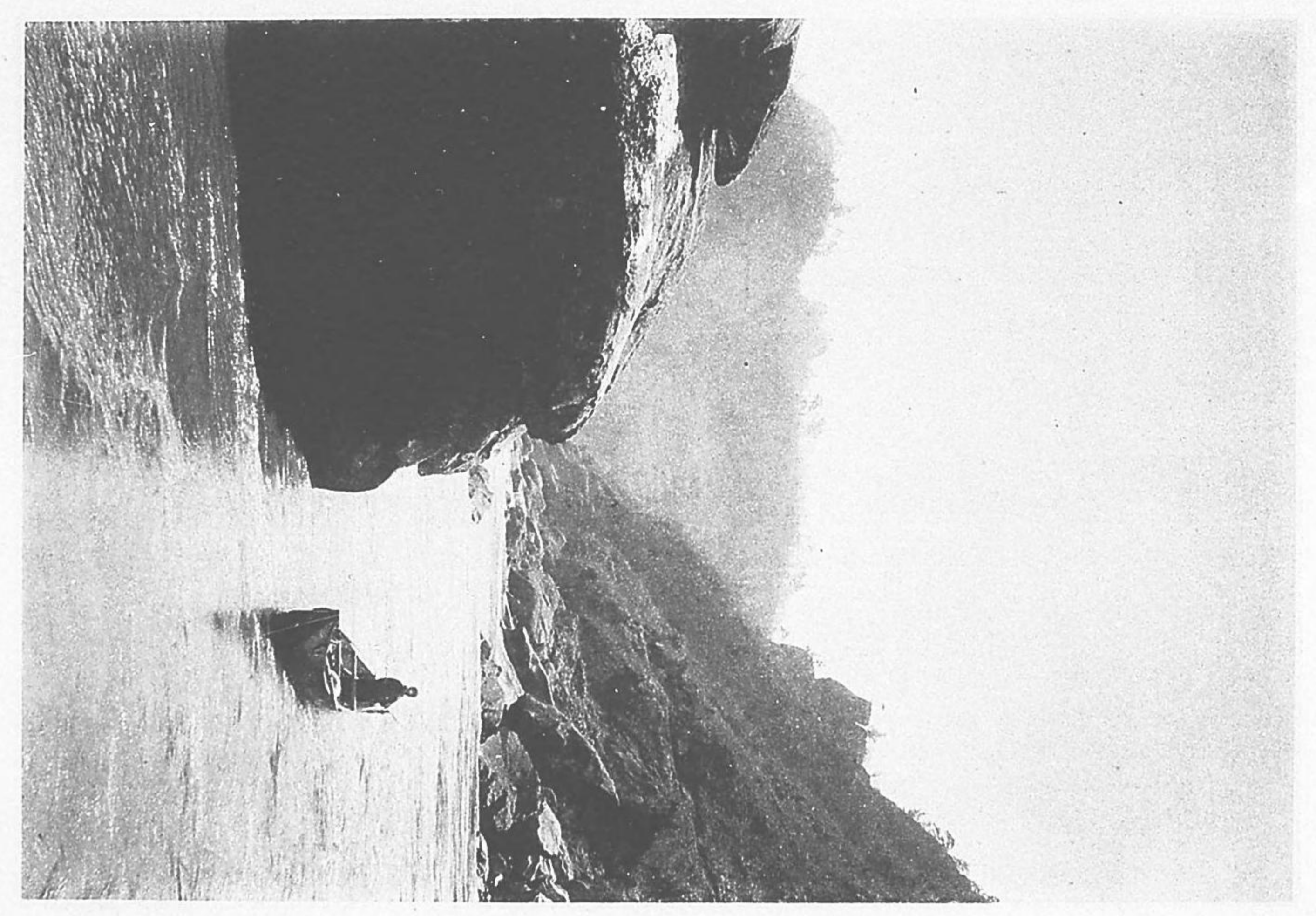
危舟犀川の急流を下る

前と同じところ

忽遇一大巖屹立水中、舟殆觸之、少誤則
盪粉矣、衆懼而默、舟
人笑振柁避之、輒掠
巖角過、如此者數處、
未嘗差絲毫……
齋藤祖堂

敬請諸君
 幸垂青睞
 總代理 東京 丸善堂
 人英社 總發行所
 總發行所 東京 丸善堂
 中興會社 總發行所
 敬請 大藏部 立本

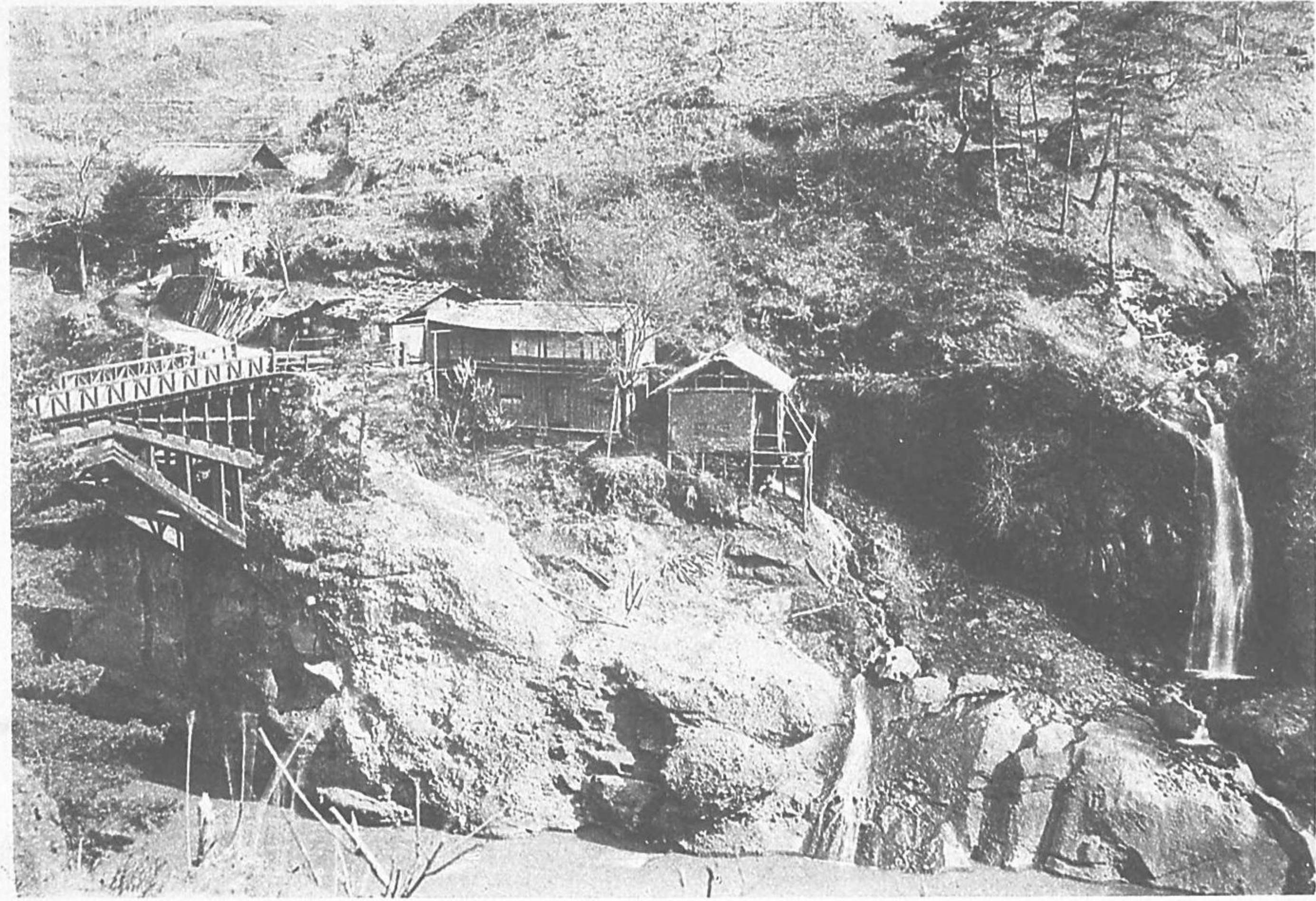
前と回とを
 敬請諸君の注意を



久米路の橋不動瀧

信濃水内郡にあり新町より一里

こゝは梓川厚川落 合て大河となりた るにかけ橋あり面 白き形したる岩ど も数多ありてまこ さに絶景の地なり 此橋を水内はしこ いふこれ當國三橋 のつなりゆくさ きの所かはれば信 濃路にかゝる難所 もうきみのちばし 續藤栗毛



八米穀の餅不慮齋

奇巖水内郡の海内一里

八米穀の餅不慮齋 奇巖水内郡の海内一里	奇巖水内郡の海内一里 奇巖水内郡の海内一里
------------------------	--------------------------

別所安樂寺四層八角塔

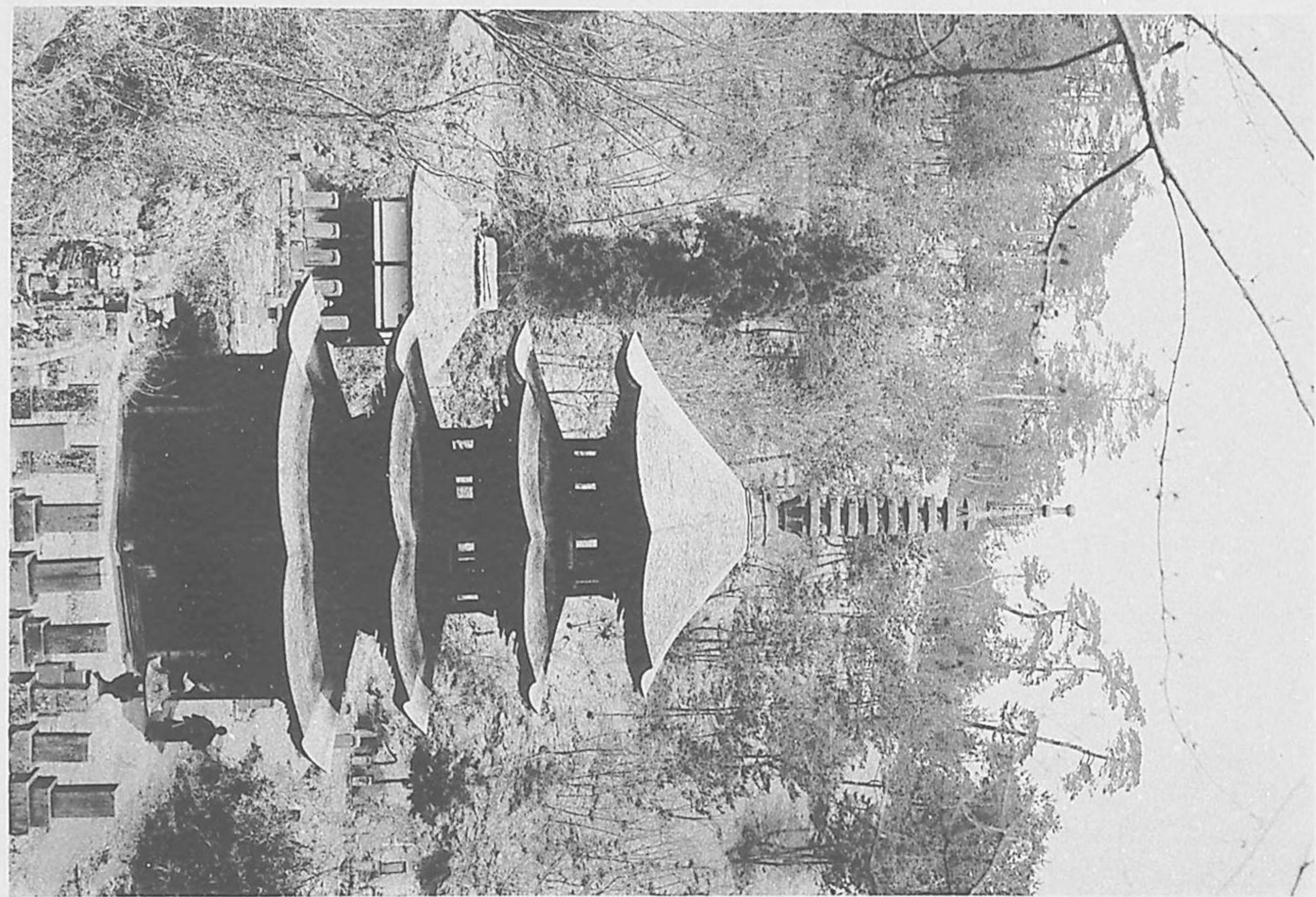
別所温泉場は上田を距る三里なり

塔は境内山林の中腹
にあり建立時代詳な
らず(足利初年?)とい
へども境内に護摩堂
ありいふ所もあれは
樺谷禪師の再建より
以前のものなるべし
………信濃奇蹟録

寺名 龍泉寺
 龍泉寺の再興
 龍泉寺の歴史
 龍泉寺の建築
 龍泉寺の庭園
 龍泉寺の境内
 龍泉寺の山門
 龍泉寺の中門
 龍泉寺の山門の中門

龍泉寺の境内

龍泉寺の境内



國分寺の古跡

信濃上田の町外より二十町

天平九年詔天
下諸國國別令
造金光明寺同
十一年令造法
華寺聖武紀

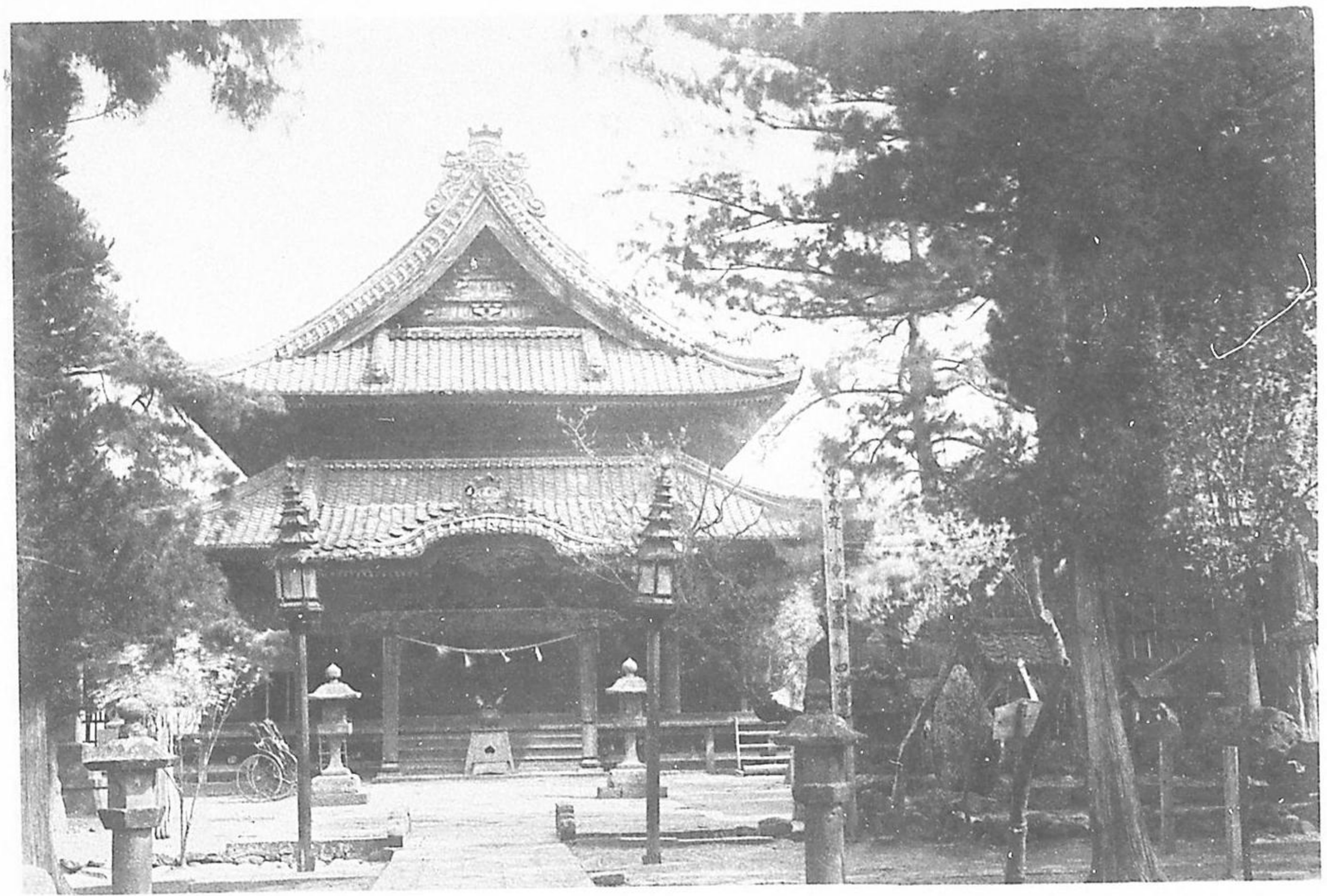


圖 公 寺 の 古 観

鎌倉五山の御長と二十間

華嚴寺	建久
十一	本
鎌倉	五山
公	寺
古	観
二十	間

信濃上田城の残壘

わづかに舊城の一廓を殘せり

初め眞田昌幸此地に城
き後ち松平忠周の城邑
たり市坊の數廿七、東西
十一町、南北六町、戸數三
千六百二、人口一万八千
四百八十を有す………
………日本名勝地誌

明治三十年十月十日印刷
明治三十年十月廿五日發行
(旅の家土産第三號)
(非賣品)

發行兼印刷者
中尾新太郎

東京市赤坂區田町七丁目四番地
光村方寄留

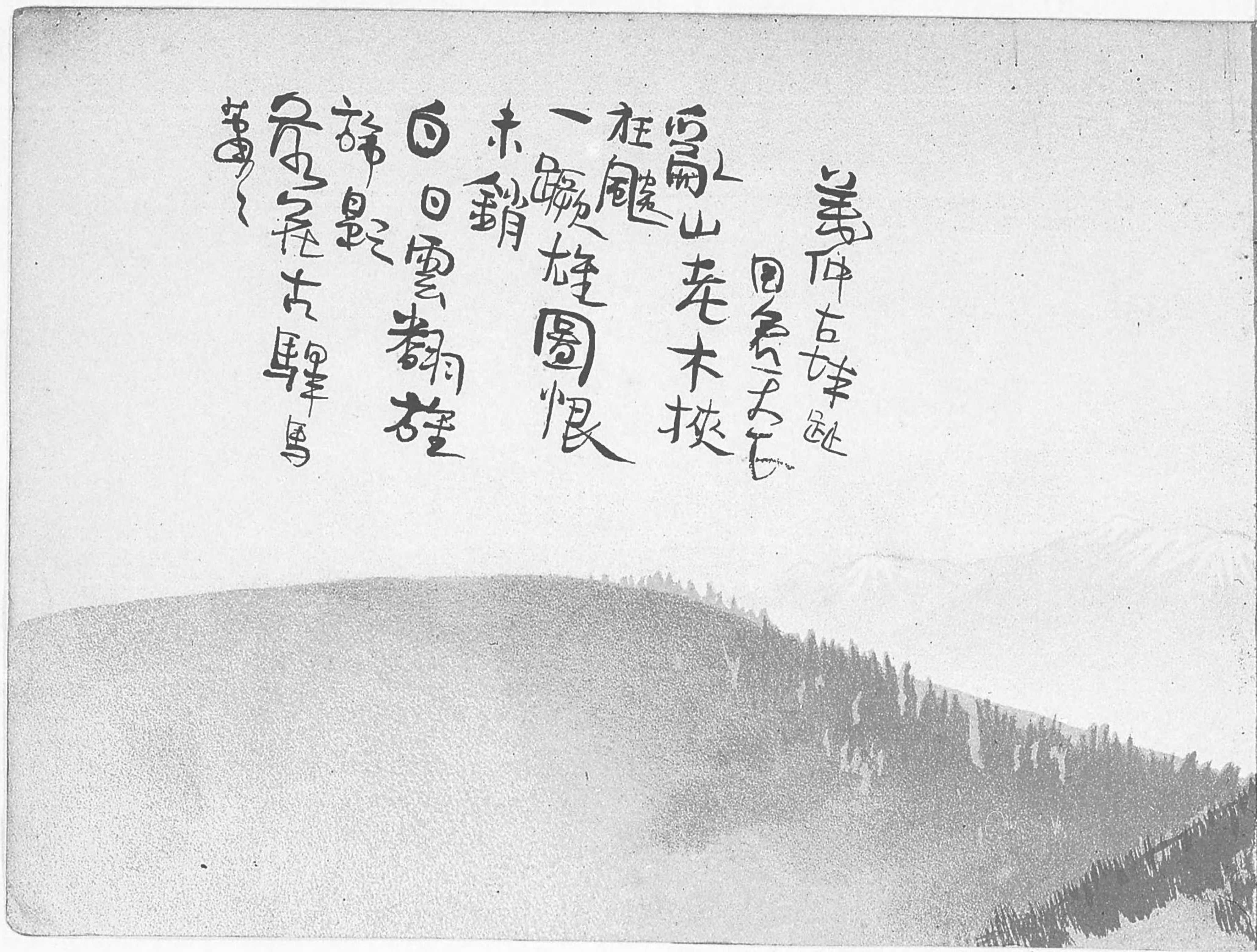
發行所
光村寫眞部

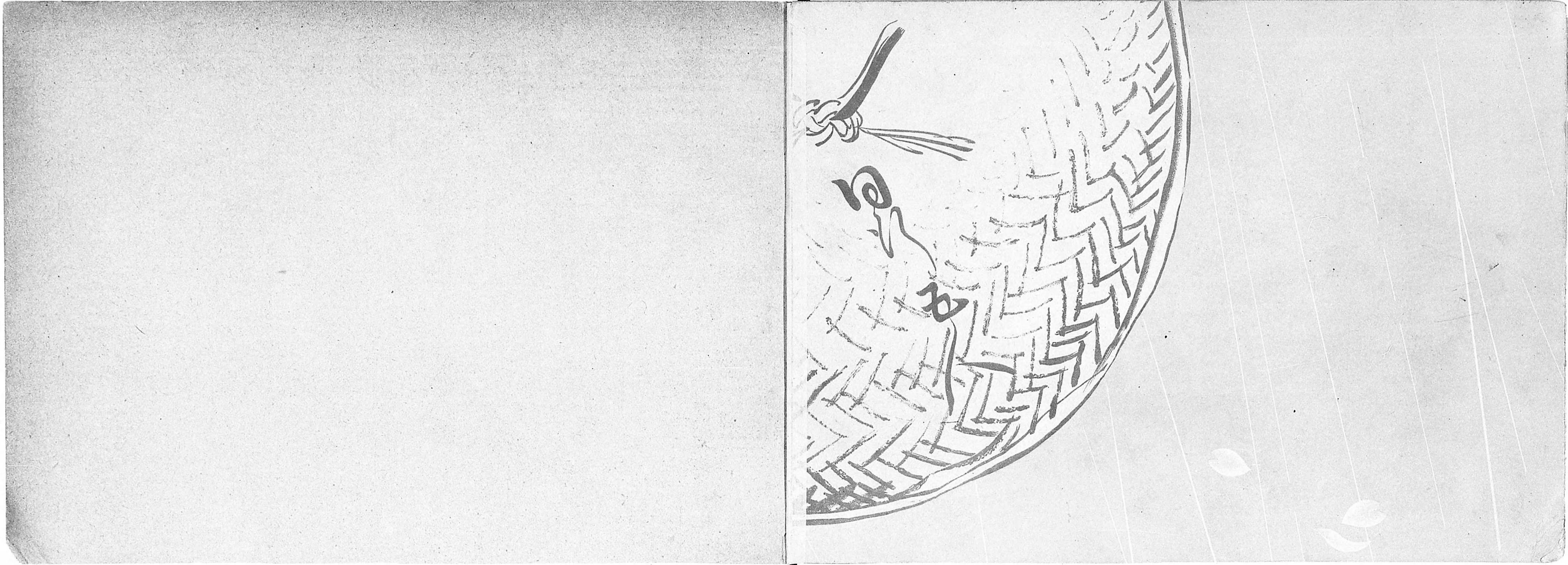
東京市赤坂區田町七丁目四番地

印刷所
光村寫眞製版部

東京市赤坂區田町七丁目四番地

美作古峰趾
日暮乃上
雪上老木挾
在籠
一跡旋圖恨
未銷
白日雲翻旌
旆影
只今在古驛馬
嘶





8
322

終

